

論 文 要 旨

氏 名	山下 浩平
タイトル (日英併記)	Changes in tonsillolith characteristics detected in a follow-up CT study (CT検査による口蓋扁桃結石の経時的変化の追跡研究)
論文の要旨 (日本語で記載)	
<p>口蓋扁桃結石は扁桃陰窩の中で細菌と反応性に富む有機質が核となって生じる口腔咽頭の結石であるが、口蓋扁桃結石は口臭や扁桃周囲炎と関係があると言われている。しかし、口蓋扁桃結石の動態はあまり知られていない。当研究室において過去に行ったCTによる研究では、口蓋扁桃結石の発見率が46.1%でありパノラマエックス線画像上での発見率より2倍以上に高位であった。今回の研究では縦断的調査にて口蓋扁桃結石の経時的変化を明らかにするため追跡調査を行った。対象を少なくとも2回以上の撮影歴のある患者のCT画像とし、326名の患者のCT画像分析を行った。その結果、初回のCT画像において、少なくとも一つ以上の口蓋扁桃結石が確認できた患者は326名中134名(41.1%)であった。初回と最も新しい経過観察のCT画像を用い、口蓋扁桃結石の数、大きさ、位置及び石灰化レベルを計測した。その結果、26.1%の結石に有意な径の増大を認めた。結石の大きさの変化率は平均±SD: 0.15±0.36 mm/year、であった。位置の変化が見られた結石は37.3%であり、そのうち92%が気道側へ移動していた。年間移動率は、-0.42±1.23 mm/year であった。一方、CT値に関してはほぼすべての結石が変化し、84.3%の結石で上昇、12.7%のものに低下を認めた。年間変化率は、51.6±102.1 HU/year であった。また、大きさ、位置、石灰化レベルのそれぞれの関係性について統計調査を行った結果、大きさと大きさの年間変化率、また、深さと深さの年間変化率で有意な相関関係が発見された。初回のCT画像上で観察された扁桃結石のうち、小さいものほど、大きさの年間変化率が大きかった。また、より深い位置にあるものほど深さ(気道側への動き)の年間変化率が大きかった。</p> <p>今回の研究で時間経過にて結石の数が増減すること、口蓋扁桃結石の石灰化度は常に変化していること及び、大きさが増し、異物として対外に排泄される傾向が認められた。</p>	